

論文の要旨

論文題目 『新古今和歌集』と唐詩の比較修辞研究
氏名 趙 青
学位 博士(文学)
授与年月日 平成20年2月29日

目的と視点

『新古今和歌集』を中心とする和歌の修辞技法や表現形式を、そこに見られる中国詩の影響とその日本的展開をたどり分析することによって、八代集の到達点としての『新古今集』歌の本質を探ると同時に、平安朝から中世初期の人々の美意識や外国文化受容の姿勢を明らかにする。これと同時に、和歌修辞という視点から漢詩を考察することによって、中国的な思考様式から生まれた独自の修辞や美意識及びその特徴を分析する。このような修辞面での比較を通して、日中の古典的文学表現の共通性・差異性を明らかにすることを目指す。

構成

全体の構成はより一般的かつ広範な修辞現象から説き起こし、より個別の細部現象へと分析を進めることとした。この意図にしたがって全体の構成は以下の六章となる。

共感覚表現

レトリックとして「共感覚」(ある領域の感覚を表す語を用いて他の領域の感覚を示唆する技法)的な表現を用いる和歌を研究対象とする。初期の共感覚的表現には漢詩の受容がよく見られる。新古今時代になると、共感覚的表現の歌が増え、また特種な新しい表現が出てくる。そのなかの「梅が香」を詠み込んだ歌を、視覚と嗅覚の交錯する「にほふ」「かをる」との関連で、漢詩と比較しながら考察した。結果として、「梅が香」についての共感覚的表現歌は、漢詩から触発されつつ、日本で独自の展開を遂げている。また、「梅が香」を恋と結びつけるモチーフの生成にも注目し、その一つの到達点と見られる梅の香りを詠んだ定家の歌について、新しい解釈を試みた。

内的視覚の修辞的操作

風景の切り取り・焦点の移動・平面化・ぼかし・残像効果など、和歌表現に用いられる五つの技巧について考察した。視覚的效果を上げるためのこのような工夫は、平安歌人の高度に修辞的な技法として時代を経てますます洗練され、新古今に至っている。また、視覚的操作による表現について和歌と漢詩を比較すると、共通する部分もあるが、明らかな

相違点も見られる。それは日本と中国の生活様式・世界観・審美観などの相違と関係している。新古今時代の歌人は漢文化を確かに受容しながら、それを更に日本的世界観、あるいは和歌の源流である万葉的世界と照合させて、独特の世界を築き上げたということが出来る。

本歌取りと唐詩の「点化」

和歌の本歌取りと唐詩の「擬樂府」「点化」「集句」との異同について検討し、歌論・詩論から日本と中国の「引用」に対する考え方や評価の差異を考察した。「著作権」は和歌の世界でも唐詩の世界でも意識されているにもかかわらず、その本歌あるいは原詩を取る方法はまったく逆である。その原因としては、1 詩型、2 目的、3 本歌・原詩に対する態度、の三点が考えられる。

また、自然の景色など世界すべてに人事的な要素が付与される伝統を持つ中国では、後にその人事的要素を意図的に取り除く努力が払われ、客観的な世界把握に傾いた。これに対して自然が自然として捉えられる日本では、その自然の景色の深みを増すために「本歌取り」を用いる傾向が見られる。

掛詞と双関

先行研究の和歌「掛詞」の分類法を踏まえ、それを漢詩の修辞法と比較するために、歌例と詩例の「二つの想」(A と a の二概念) にそって文脈や前後関係に応じた図式化を行った。その結果、和歌の場合、文の前後関係は並行にならず、A と a の二概念が掛詞によって交錯して旋律美をもたらしていること、これに対し、漢詩では「二つの想」が並存し、A 概念と a 概念が各々自律して整えられ、和声美を構成していることを明らかにした。本章ではまた、中国の対句的発想が反映される修辞法を詩例によって説明し、掛詞を用いた和歌とこれに近似する修辞をもつ漢詩の言語遊戯的な作品を紹介した。

歌枕「塩釜の浦」の新古今的展開

「古今集」の時代には舟・煙・海人などが連想され、さびしさや荒涼たる雰囲気をもっていた歌枕「塩釜の浦」は、「新古今」になると、月や霞などと結びつけて詠まれるようになり、古来の抽象的に固定した連想から叙景的な描写へ重心が移動した。「塩釜の浦」の景勝を園池に模して造られた平安京の河原院を手がかりにして、「塩釜の浦」をめぐる煙・月・霞の表現の推移・展開をそれぞれ時間軸に沿って考察した。河原院と源融の風流、安法サークル、漢詩・漢語の影響など、種々の要因から、歌枕「塩釜の浦」はその地名にまつわる古いイメージを留めながら、次第に付加された幾つものイメージを重層的に合わせもつ、新古今的な「塩釜の浦」に変身するのである。

「政治的寓意」とその周辺

「寓意」とりわけ「政治的寓意」をめぐって、漢詩と和歌の修辞を比較・考察した。漢詩と比べて、和歌では「埋れ木」的な寓意表現が主流を占めており、政治批判あるいは社会的現実を反映した詠作が少ない。王朝が頻繁に交替し、儒学的政治イデオロギーの伝統が強い中国では、科挙制度によって様々な階層の人間が政治に参加することが可能であった。したがって、詩人たちもまた自ら参政願望をもつ人々であり、詩文も多分に政治的だった。これに対し、一系の天皇を頂点として藤原氏の摂関政治が続いた日本では、歌人たちの多くが政治的な場から疎外された人々（皇位継承権を持たない公家や政治的権力を持たない貴族層）であった。このような歌人と詩人の社会的位置が、和歌と漢詩における「政治的寓意」の質と内容の相異をもたらした原因だと考えられる。中国においては恋愛詩に託して政治的意図が語られるが、日本においては恋が恋の感情そのものとして歌われ、歌集に「恋」の部が不可欠であることも、この文脈において考える必要があることを示した。

結論

儒学的政治イデオロギーの伝統が強い中国の漢詩は政治的文学である。また秩序を重視する分析的な世界観を背景として理性的・合理的な作品が多く詠まれる。二元的対句的な発想法は詩行に並行的な文脈構造をもたらし、端正で荘厳な姿をとる。唐代における漢詩のこれらの特徴が修辞技法にも如実に反映されていることは、日本の和歌修辞との比較を通して、より一層明らかになった。

一方、王朝貴族の歌人たちは、漢詩の花鳥諷詠の技巧やトピックを修辞的着想として受け入れながら、自然と情念を重ねる文学伝統とやまと言葉に特徴的な想の流れを生かし、独特に審美的な和歌の世界を造り上げた。中国文化から大きな影響を受けたにもかかわらず、言語構造や世界観の差異が生んだ修辞技法の日本的展開は、新古今時代の歌人において洗練の極致に達し、連続しかつ交錯する、情緒的で優艶な姿の作品を数多く生み出したのである。